明和産業■10年間黒字経営

緊急時に迅速対応

年中休まず荷主の信頼獲得

THE COMPANY

【神奈川】明和産業（渡辺真一社長、横浜市都筑区）は、運送と人材派遣を事業の2本柱に、厳しい環境の中で10年間、黒字経営を継続している。運送事業では、車両の増強と自社倉庫新設を視野に、近隣で用地を模索中。365日「仕事モード」を自負する渡辺社長は「荷主の緊急時に、迅速・的確に対応することが信頼獲得につながる」と話す。

渡辺社長

大学時代に土木工学を学び、現JFEグループ企業に就職。土木技師として、高速道路の橋脚工事の現場監督などを務めた。「橋を造ったり、後世に自分の仕事が残る」土木は魅力だったが、広島赴任を最後に、家業である明和産業を継いだ。

土木1級、測量士、宅地建物取引主任者、甲種火薬類取扱保安責任者など保有資格は20以上で、今でも駐車場の舗装を「施工」することもある。

明和産業は渡辺氏の父が立ち上げた会社で、製菓メーカーのパン箱の洗浄などの業務請負からスタート。15年前に緑ナンバーを取得した。現在は、製菓工場の一角に本社を置き、構内の清掃、植木の剪定（せんてい）、安全靴・作業着、寮の管理まで荷主と密着した事業を展開。運送事業では、製菓メーカーのほか、食品など大手物流子会社との取引が中心で、とりわけ「緊急便」が収益に貢献している。

「1年365日のうち、350日は会社に顔を出している。24時間トラックが動いているので、気の休まる間がない」と渡辺氏。安全や集車力はもちろん、急なオーダーに対する「備え」がこだわりで、「緊急時にどれだけ対応できるかが、パートナーとして荷主に信頼されるカギ。信頼されないと、長いお付き合いをしてもらえない」と強調する。

工場直伝の厳しい品質管理も浸透している。積み込み時の荷台の清掃、ドライバーの帽子着用のほか、荷主によってはマスク着用のケースもある。ドライバーは茶髪、ひげ、ピアス、鉢巻きは厳禁で、構内で足を上げて休むことは当然、厳しく禁じている。「ドライバーには、いつもお客さまを意識した優しい運転と、感じの良い接客態度を心掛けるよう言い聞かせている」

人材派遣事業は、製造業への原則派遣禁止の動きがある中で、先が読めない状況が続く。運送事業で新規荷主を取り込むため、現在14両の自社車両を20両体制に増強したい――との思いを強めている。その前提となる用地を確保できれば、賃借している990平方㍍の倉庫を返却して車庫と自前の倉庫を構え、将来的には売上高を10億円程度まで引き上げたい考えだ。

飲酒・酒気帯び運転の規制と罰則が強化されてから、飲食によるコミュニケーションの機会が減り、年に一度の社員旅行で社員の労をねぎらっている。社員の定着率が良く、60歳代後半の事務職員を「現役」として見守り、事故が起きてもドライバーには負担をさせないなど「親心」がうかがえる。渡辺氏は「家族的な雰囲気を大切にしていきたい」と話す。

（石井　麻里）